

## バウハウスに関する研究

## その7 バウハウスとテキスタイル

正会員 ○柚本 玲\*  
終身会員 田中 辰明\*\*

バウハウス                      テキスタイル                      織物工房  
女性                                  ヴァイマル

## はじめに

バウハウスは1919年にドイツ ヴァイマルに設立され、その後 Dessau、ベルリンに移転した。バウハウスは建築をはじめとして工芸、デザイン、写真などを含む総合的な教育を行う芸術学校である。本研究では、バウハウスにおける女性及び織物工房に着目した。

## バウハウスと女性

1918年ドイツ帝国が崩壊、第一次世界大戦が終了し、1919年にヴァイマル共和国が誕生した。同年8月に制定・交付されたヴァイマル憲法は、国民主権、財産に制限のない男女平等の普通選挙権といった点から、制定当時、極めて民主的な憲法とされた。

ヴァイマルに発足したバウハウスは、性別や人種の区別なく学生を募集すると要綱にうたったため、女性の入学志願者が多かった。実際、述べ500名の女性が学んだといわれる。また、バウハウスは建築を教育目標として掲げており、この学習を希望する女子学生も多かった。

しかし当時は高等教育を受ける女性が社会的に受け入れられていなかったため、初代校長のヴァルター・グロピウス (Walter Gropius, 1883-1969) は、女性の入学者数を減らすと宣言している (Fig. 1)。またグロピウスは「建築は3次元である。女性は2次元でものをとらえることは出来ても3次元でとらえることが出来ない」として、女性の建築の受講を拒否したとされる。後述するゲルトルート・アルント (Gertrud Arndt, 1903-2000) は、「本当は建築家になりたかった」という著書を残している。

バウハウス発足2年目には「女子部」として織物工房が発足した。バウハウス発足当時は国から十分な予算がついていたが、政権交代により予算が削減された。その後、この工房で製作された絨毯などの作品を販売することで学校運営費に充てた。このように女子学生を女工のように扱った面があることは否めない。

## バウハウスの女性マイスター

バウハウスではグロピウスの教育理念により予備課程が設けられていた。これを任されていたのがスイス出身のヨハネス・イッテン (Johannes Itten, 1888-1967) であっ

た。最初に教育学、後に美術を学んだ。芸術は天性のものであると考えられていた時代に、訓練によりある程度の域に達することが出来るとし、芸術教育に大きな影響を与えた。織物工房で不満を持ちつつ仕事を行っていた女子学生は、イッテンから学んだ色彩学や形態学の知識を製作に活かし、その製品が市場で人気となった。1923年イッテンはグロピウスとの意見対立からバウハウスを去った。

グンタ・シュテルツル (Gunta Stölzl, 1897-1983) は、織物工房における初代の女性教員 (Meister) である。シュテルツルは織物工房の売上げが一番大きいにも関わらず、自分の給与が男性教員より安く、かつ織物工房の地位がバウハウスの中で最低であることに不満を持っていた。このことに関しシュテルツルとグロピウスの交換文書がベルリンのバウハウス文書館に残っている。

イッテンの後任として予備課程を担当したのが、モホリ・ナギ (László Maholy Nagi, 1895-1946) とヨーゼフ・アルバース (Josef Albers, 1888-1976) である。ナギは表現材料として当時やっとなりが始まったばかりの写真の教育に取り入れている。

ゲルトルート・アルントは、女子学生が女子ということにより織物工房へ送られることに不満を持っていたが、優秀な作り手であったようだ。その作品である絨毯は、グロピウスがヴァイマルのバウハウスにおける校長室で使用し、現在も保存されている。アルントは写真にも興味を持ち、ナギが取り入れた技術を学び、自分をモデルにしたセルフポートレートを撮っている。

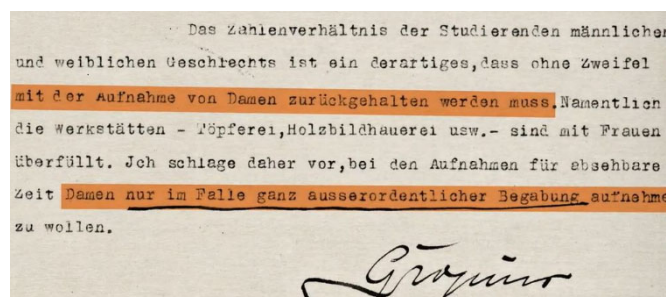


Fig. 1 グロピウスの書簡

## 留学生 山脇 道子

日本からバウハウスに留学した女性に山脇 道子がいる。東京女子高等師範学校附属幼稚園、小学校を経て、同高等女学校を卒業後、建築家の山脇 巖（旧姓藤田）と結婚、巖と共に 1930 年に米国経由で渡独、バウハウスに学んだ。帰国後、自由学園工芸研究所で指導を行う傍ら、雑誌「婦人画報」でモデルをつとめている。バウハウス創立 75 年にあたり、回顧録「バウハウスと茶の湯」（新潮社 1995 年）を著した。

## ナチスとバウハウスの女性たち

フリードル・ディッカー（Friedl Dicker, 1898-1944）はオーストリアに生まれ、ヨハネス・イッテンがウィーンで開いていた美術学校で学んだ。1919 年にイッテンがバウハウスに招聘されたのを機にバウハウスに移り、織物工房で活躍した。1923 年に同僚のフランツ・ジンガーをパートナーとして、ベルリンで「造形美術学校」を設立した。1925 年には、ウィーンでデザインスタジオを開設し、家具類を設計し、デザイン性の高さが評判を呼んだ。しかしユダヤ人であったため、パートナーと共にアウシュビッツ強制収容所に収監され解放直前に殺害された。ディッカーは収容されていた子供たちに絵画を教え、解放後多数の子供たちの作品が発見され、世間の涙を誘った。

オットー・ベルガー（Otto Berger, 1898-1944）も同様にアウシュビッツ強制収容所に収監され解放直前に殺害された。山脇道子は特にベルガーに世話になったとし、著書「バウハウスと茶の湯」で哀悼の意を表している。バウハウスではユダヤ人学生も多数在籍していたのでナチスの犠牲となった人も多かった。ベルリンのバウハウス記念館にはナチスの犠牲となったバウハウス関係者を悼むプレートが設けられている（Fig. 2）。

## バウハウスのテキスタイル

バウハウスの織物工房において、数々の優れたデザインのテキスタイルが創作された。上質の織物を創作するには、織物の構造、糸や布の染色について理解し、幾何学的なデザインの発想力を身に付ける必要がある。織機はたて糸を上下させるための綜統、よこ糸を打ち込むための筵、よこ糸を通すための杼（シャトル）等から成る（Fig. 3）。柄を考慮して並べたたて糸を上下させた間に、よこ糸を通し、布地が織られていく。また、柄を出すために必要な色の糸を染色する際、繊維、染料及び助剤とその濃度、温度や浴比、染色時間などの条件を理解し、その技術を身につけている必要がある。例えば羊毛など

動物性繊維の染色には、酸性染料を用い、染液の酸性を維持するために酢酸などを助剤として染色する（Fig. 4）。これらの知識や技術の基礎の上に、色彩学や形態学の知識に裏付けられたデザインが発想され、創造的で質の高い創作が行われたものと考えられる。

## おわりに

バウハウスにおいて、1919 年という女性がまだ学問と接することが非常に難しい時代に、女性教育者が存在し、延べ 500 名といわれる少なくない女性をその創作成果とともに社会へ輩出したことが確認された。

## 参考文献

- 1) 成瀬 信子ら；改訂版 基礎被服材料学；文化出版局（2014）
- 2) 山脇 道子；バウハウスと茶の湯；新潮社（1995/4）
- 3) Weltge-Wortmann; Bauhaus textiles: women artists and the weaving workshop; Thames and Hudson (1993)

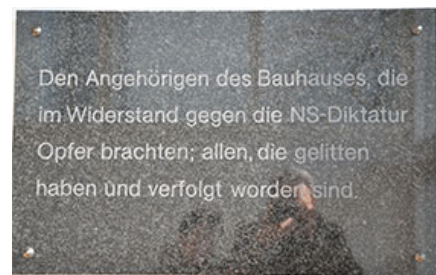


Fig. 2 ナチスの犠牲になったバウハウス関係者を悼むプレート

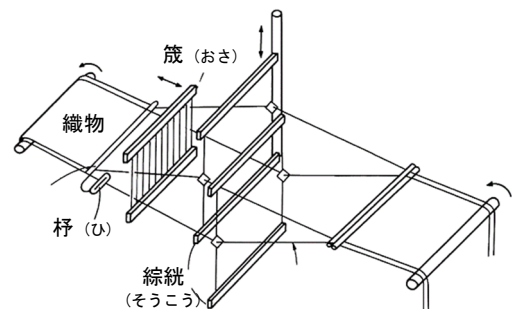


Fig. 3 織機の構造を単純化した概要図<sup>1)</sup>

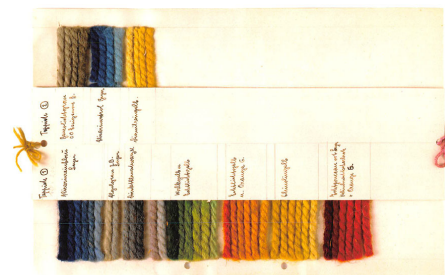


Fig. 4 絨毯用毛糸のサンプル 1924 年（アルント）

\* 文化学園大学 服装学部 准教授・博士（生活科学）

\*\* お茶の水女子大学 名誉教授・工博

\* Associate Prof., Faculty of Fashion Science, Bunka Gakuen Univ., Ph. D

\*\* Ochanomizu Univ., Emeritus Prof. Dr. Eng.